

# リチャード・マルカスターの『提言』（1581年）にみる

## 精神と身体の Exercise に関する研究

永吉由季\*

指導教員：榊原浩晃，兄井彰，本多壮太郎

### **A historical study on the term and concept for ‘exercise’ related to human body and mind as described in Richard Mulcaster’s *Positions*(1581)**

**Yuki Nagayoshi**

#### **Abstract**

The purpose of this study is to clarify the term and concept for ‘exercise’ related to human body and mind, which were described in Richard Mulcaster’s *Positions*(1581). His book includes many contemporary words and phrases related to exercise and training whose actual usage and meaning refer to the relationship between the body and mind in human nature. In this study, we have focused on Mulcaster’s thoughts on student education and daily exercise. We examined the relationship between body and mind by viewing his educational thinking as a philosophical problem. The first stage of the study involved comparing specific linguistic examples with the terms and phrases used throughout the book. There were four keywords in this study: body, mind, soul, and flesh. One must examine the role of exercise during Early Modern Humanism in England. Mulcaster mentioned the cultural attitude toward the pupil’s body and mind and physical exercise during his schooldays, when English was the native language. At the time of modernisation in Tudor England, Mulcaster played an active part as the principal of Merchant Taylors’ School. He recognised the importance of both religious education and physical exercise in a student’s daily life. Although a Christian God ruled over the soul and only the flesh was regarded as the human body in the Middle Ages, Mulcaster insisted that both body and mind form a human being. Thus, Mulcaster highlighted the relationship between body and mind, and insisted on the importance of physical exercise most of all. In the context of Renaissance Humanism, Mulcaster explained in *Positions* that the campaign to clarify the relationship between body and mind was necessary to educate and train young pupils who were growing up as humans. Further, Mulcaster insisted that the exercise of the body accompanies and assists the exercise of the mind.

**Keywords : Richard Mulcaster the relationship between body and mind exercise**

キーワード：リチャード・マルカスター 心身観 修練

---

\* 福岡教育大学大学院 教育学研究科 教育科学専攻 保健体育コース（体育学領域）

## I. 序 論

### 1. 研究の目的

本研究は、リチャード・マルカスター (Richard Mulcaster c.1530-1611) の著書である『提言』(1581年) にみる心身観及び精神と身体の Exercise について明らかにすることを目的とする。マルカスターは、16世紀イギリスの人文主義者であり、彼の生きた時代の母国語教育と身体教育に関する教育論の論者として知られている。イギリス近代初期の当時の教育については、知性や精神(mind)の教育が想定されていたが、マルカスターは身体(body)の教育の重要性をいち早く主張していた。近代初期英語のルネサンスの時代に、マルカスターは教育論を一冊の本にまとめ上げ、知性や精神(mind)の教育を母国語教育によって推し進めようとした。そこでは、身体(body)の修練に重きを置きながら、知性や精神の修練と身体の修練を結びつけた教育のあり方をめぐって持論を展開していた。マルカスターのこうした教育論は、彼の著書『提言』(1581年)の出版直後には注目されなかったが、19世紀に入り近代の教育制度が発足した時期に、彼の先見的な知見が見直され、彼の教育論そのものに関する研究も数編があげられるようになっていく。

### 2. 先行研究の検討と本研究の意義

マルカスターの先行研究はけっして数多いわけではない。Robert Hebert Quick が、1888年の『提言』復刻版の出版に際して、マルカスターの生涯と著作を紹介している(Quick, 1888)。マルカスターの資料集としては、1903年のJames Oliphantによるものがある(Oliphant, 1903)。イギリス以外でのヨーロッパでは、教育者としてのマルカスターの人物像が研究されている。Theodor Klährによる1893年のドレスデン大学の教育学の博士論文は、16世紀イギリスの教育思想家としてのマルカスターの生涯と業績と題している(Klähr, 1893)。また、オランダのRichard L. Demolenは、ルネサンス期の教育改革とイギリス人教育者のリチャード・マルカスターを関連づけている(Demolen, 1991)。Jacqueline Cousin-Desjobertの近年の研究書『イギリス・ルネサンス期の教育者リチャード・マルカスター』もある(Desjobert, 2013)。

マルカスターの業績と主著『提言』に言及した体育史研究として、英語圏の研究や叙述には、Brailsford (1969), McIntosh (1957), Leonard (1947)のものがあるが、『提言』がルネサンス期のイギリスで修練の重要性を英語で記述した先見性を評価しつつも、当時の教育論にみる心身観の位置づけや修練と身体あるいは精神との関連性を吟味しているとは言い難い。いずれの先行研究やその叙述も『提言』の内容の全体に及ぶ検討やテキストの全体の記述を研究対象にしていないのである。日本語での叙述としては、体育学の領域で加藤元和氏と阿部生雄氏の研究がある。また教育学の領域では、渡辺誠一の研究がある。

今日の体育や運動の淵源を把握する作業は、近代初期の人文主義者の修練(身体運動)にあり、それらを吟味しようとする時、まずマルカスターの『提言』(1581年)を研究対象とすることはその源流に遡り考察することになり、体育哲学・体育史研究にとって資するところが大きい。

先行研究では1888年のものを用いて研究されていることが多いが、本研究では1581年のマルカスターの『提言』を用い研究を進めた。提言(1581年)のテキストそのものを研究対象にすることにより、マルカスターの心身観や提言(1581年)におけるExerciseの位置を明らかにする。

### 3. 本研究の課題と方法

本研究では、まず第1に提言の内容とExerciseの位置について読み取ろうとした。そのために最初に提言の内容の概略を考察した。方法としては提言(1581年)の目次の部分を和訳し、提言(1581年)に書かれている45章の内容を大きく5つに分類し、さらにその中でそれぞれの章について説明している。続いて先行研究に基づいて身体訓練の必要性・重要性やExerciseの定義、身体修練の体系的整理などに言及し、Exerciseの位置を論証した。

第2にリチャード・マルカスターの心身観について読み取ろうとする。body(身体)及びmind(精神[知性])、flesh(肉)及びsoul(精神[霊・魂])の用語を含む用例をマルカスターの提言(1581年)から抜粋し、文法的にどのように使われ

ているかを吟味し、それらから **body, mind, flesh, soul** の関係性を読み解いた。その後、提言 (1581年) にみられる **body, mind, flesh, soul** のいずれかの用語を含む構文を幾つか取り上げ、マルカスターの主張や心身観を明らかにした。

第3に、マルカスターの身体運動論にみる内容論と方法論について考察を加えた。

まず心身観の用例と同様にマルカスターの提言 (1581年) の中から **exercise** が含まれている用例を抜粋し、文法的に分類した。文法的には具体的に①名詞、②動詞、③**exercise+of+名詞**、④名詞+**of+exercise**、⑤形容詞+**exercise**、⑥前置詞+**exercise**、⑦動+**exercise**、⑧形容詞である。**training, education** に関しても同様である。文法で分類したのち、それぞれが提言 (1581年) の中でどのように扱われているかを明らかにした。

さらに、**exercise, training, education** の抜粋した用例の中から幾つかを取り上げ、試訳した。それらの試訳からマルカスターの修練や訓練、教育の捉え方を論証した。

## II. 本 論

### 1. イギリス近代の社会と Mulcaster の人となり

マルカスターが生きた時代であるテューダー朝はヘンリ7世 (Henry VII, 在位 1485~1509) が即位した 1485年からエリザベス女王が死去した 1603年の約 100年間の時期を指し、16世紀のことである。その時期に生じた大航海時代の開幕と展開、絶対主義国家の形成、アルプスを越えて広がったルネサンス、そして宗教改革など様々な諸事件がイギリスに波紋を描くこととなる。16世紀後半になると、一種の芸術運動の底流にあった感覚の肯定的、文学や美術の世界で感覚を重視する考えは、広く浸透し、身体の構造についての考察も進み、観念的・教条的な身体論から脱却しつつあった。この変化はルネサンスを支えた担い手が都市の中産階級であったことが大きく影響していると考えられる。彼らは、親から相続される多少の財産だけでは激動の時代を生き抜くことはできず、伝染病が流行する中、身体の健康に気をつけながら、

自己の知恵と勤労で生活的なステータスを目指してきた人たちで、身体のもつ能力にも気づくようになり、そのための訓練の必要性も意識されるようになったと思われる。

マルカスターは、イギリス・ルネサンス期の代表的な人文主義者であり、教育者である。彼は、1530年マンチェスター近郊の村で、ジェントリの子として誕生した。1561年から1586年までは Merchant Taylor's School の初代校長、1596年からは St. Paul's School の校長に就任している。1598年には、エセックスのスタンフォード・リバーの主任司祭に叙任され、1611年当地で死去している。彼は自分の教育論を2冊の著書で展開している。

1冊目は1581年出版の「子どもたちの学力のためなのか、あるいは身体の健康のためなのか、両者を育てるために必要な基本的な環境を吟味する提言」(*Positions wherein those primitive circumstances be examined, which are necessarie for the training up of children, either for skill in their booke, or health in their bodie*) であり、2冊目は1582年に出版された「初等教育論第一部、特に英語の正しい書き方について」(*The First of the Elementarie, which entreateth chiefelie of the right wrighting of our English Tuny*) である。

またマルカスターの教育論の特徴の1つは、母国語教育の重視である。マルカスターは知育の順序として、読み方の学習を1番に掲げている。理由としては、「教育のやり取りの中で文字は最も重要で最も簡単な印象である。それに勝るものはない。(Mulcaster, p.29.)」と述べている。さらに、マルカスターは最初に学習すべき言語は、母国語であるとしている。それは第一に母国語が信仰に最もふさわしい祖国の言葉であること、第二に、母国語は最初に話す言葉であり、かつ最も使う言葉であることを理由と説明している。これらの背景には、ルターの宗教改革の影響による福音主義の浸透が言語教育についての考えに大きな変化をもたらしたことがあげられる。

### 2. 提言の内容と Exercise の位置

マルカスターの『提言』は全45章で構成されている。Table 1. (Table 1. Richard Mulcaster の *Positions*(1581)にみる内容構成と修練の位置づけ)

Table 1. Richard MulcasterのPositions (1581)にみる内容構成と修練の位置づけ

Chapter1.	提言の導入	Chapter24.	乗馬
2	提言の発刊理由と背景	25	狩り
3	提言の発刊の影響	26	射撃
4	学び始める時期と修練	27	球戯
5	子どもの知性と身体	28	修練の環境
6	知力・記憶力・判断力	29	修練の本質と特性
7	身体 <small>の</small> 修練と鍛錬について	30	修練する際 <small>の</small> 特性
8	修練に関する言説	31	修練する場所
9	修練の定義	32	修練する時間
10	特徴的な修練について	33	修練を維持する量
11	大声で話すこと	34	修練への姿勢と態度
12	大声で歌うこと	35	教師の修練
13	朗読すること	36	すべての人への教育
14	多くを語ること	37	学ぶことの抑制
15	笑うこと、泣くこと	38	女性の教育
16	呼吸の維持	39	ジェントルマンの教育
17	踊ること	40	教育の一般的な場所と時間
18	格闘すること	41	一般的な教師と補佐
19	武器をもって戦うこと	42	言語や文法の習得期間
20	絶頂と苦しみ	43	学校の均一性と責任
21	歩くこと	44	指導の確実性と最も効果的な環境づくり
22	走ること	45	総括
23	跳ぶこと		
	泳ぐこと		

(出典) Richard Mulcaster, *Positions wherein those primitive circumstances be examined, which are necessary for the training up of children, either for skill in their books, or health in their bodies*, 1581, London

はマルカスターの『提言』(1581年)にみる内容構成と修練の位置づけを一瞥できるように作成したものである。それら45ものChapterは第1に、提言の発刊理由と背景、第2に、子どもの知性と身体、第3に、修練(運動)について、第4に、教育における修練と教師の役割、第5として、総括という5つに大別することができる。

提言の発刊理由と背景において、Chapter 1の「提言の導入」は、Queen Elizabeth Iへの献辞にもみるように、ラテン語表記ではなく、英語表記による知見を提示することの時代的要請と意義を語っている。このことは、マルカスターの母国語教育論とも矛盾しない。Chapter 2の「提言の必要性」やChapter 3の「提言発刊の影響」は発刊にあたって期待することを述べている箇所であって、マルカスターの発刊の主張と受け取ることができる。

子どもの知性と身体をめぐることは、Chapter 4「学び始める時期と修練」では、その最も望ましい時期であるとして、親は子どもを学校に行かせようとする考え方を持つべきであるという。当該時代の認識として、子どもにおける精神(知性)と身体の相違が指摘されており、修練としては、同様に対象にしなければならないという。Chapter 5「知力・記憶力・判断力」では、子どもたちが訓練されるのは、どのような事柄なのかを問い、言葉を身につけるのに注意することは何かと親や教師を問いただしている。子どもに備わっている3つの能力として、「知力・記憶力・判断力」を知性として包括しているものの、この3つをめぐることは、大抵は子どもの面倒を親が担っており、次いで教師に委ねられている。学校での教育にあっても、望ましい行為や養育のために子どもを修練させることは、教師のみが為すことではないという。

身体修練については、身体による修練、つまり、身体運動を意味している。Chapter 6「身体の修練と鍛錬について」では、運動することはなぜ必要か。健康とは何か、いかに健康は維持されるのか。病気とは何か、いかに病気は生じるのか、そしていかに病気は予防できるのか、の問題を提示している。健康の維持のために、運動が役割を果たしており、生徒や彼らの健康についてみると、全ての運動は大抵一部分を軽く動かすものであっても、身体全体を良くしていると認識している。Chapter

7「修練に関する言説」では、運動に関するこの言説めぐって、その順序や方法を説いている。そして、Chapter 8「修練の定義」では、①競技的修練、②軍事的修練、③健康のための修練に分類している。Chapter 9「特徴的な修練について」は、修練の採択やその採択の判断をしたり、新たに修練を考案したりすることが含まれている。

日常的な修練にも、身体修練は関与していることを示すために、Chapter 10「大声で話すこと」、Chapter 11「大声で歌うこと」、Chapter 12「朗読すること」、Chapter 13「多くを語ること」、Chapter 14「笑うこと、泣くこと」もそれらに含めている。身体修練の各論として、Chapter 15「呼吸の維持」、Chapter 16「踊ること」、Chapter 17「格闘すること」、Chapter 18「武器をもって戦うこと」について、修練時の主観的感受性として、「絶頂と苦しみ」(Chapter 19)に耐えることも述べている。日常的な動作としては、Chapter 20「歩くこと」、Chapter 21「走ること」、Chapter 22「跳ぶこと」、Chapter 23「泳ぐこと」、Chapter 24「乗馬」、Chapter 25「狩り」、Chapter 26「射撃」、Chapter 27「球戯」を取りあげている。

次いで、修練に関する諸条件に言及している。それらは、Chapter 28「修練の環境」、Chapter 29「修練の本質と特性」、Chapter 30「修練する際の特性」、Chapter 31「修練する場所」、Chapter 32「修練する時間」、Chapter 33「修練を維持する量」、Chapter 34「修練への姿勢と態度」である。このように修練については、Chapter 16～27は個別の身体修練に、Chapter 28～34は修練に関する諸条件に分類することができる。

教育における修練と教師の役割は、Chapter 35「教師の修練」で語られ、精神を教えることと身体を修練することの両方を教師が任されているという(Chapter 35)。男子は、もとより、女子にも学校で学ぶ機会を与えるべきである、裕福な者も貧しい者も、生徒である子どもは学ぶために寄宿舎に入居すべきなのである(Chapter 36, 38)。しかし、全員は受け入れられず、国家の意向では人々の要望は抑止されている(Chapter 37)。「ジェントルマンの教育」(Chapter 39)としては、私教育でも公教育でも、どちらでも有益であると述べている。ジェントルマンは他国を旅行し、寛容さを保持し、

活用できる豊富な科学的知識を身につけなければならぬのである。「教育の一般的な場所と時間」として、公教育の場としての初等教育、グラマースクール、カレッジが挙げられている。親の住居から離れて生活する子どもたちの寄宿について、広大で、快適に位置する修練の施設として活用され、教育にとっては必需品と位置づけられる(Chapter 40)。それらを担う教師は、一般的な教師とその補佐が確保され、初等教育も担い、中等教育も学術研究にも関与する(Chapter 41)。

子どもたちは、言語や文法に合格するまでには、初等教育をどのくらいの期間、継続するのか？彼らにとって、十分な時間というものがあるのか？必要なのかと私見を述べるが(Chapter 42)、一概には、断言されず、学年進級か、能力別進級かは、後の時代に問われることとなる。この点を問題意識としてマルカスターが考慮に入れていることに意味がある。学校では等しく学び合い、内容や秩序の維持のために平静を保つ責任があり(Chapter 43)、確実に指導の成果を上げ、効果的な環境づくりを目指さなくてはならないからである(Chapter 44)。

Chapter 45「総括」では、『提言』全体が要約され、刊行した企画が完結し、適切に表現されたことを自負して、『提言』を結んでいる。

『提言』は、身体と精神に関する修練の必要性とそうした修練を人文主義的見解をふまえて要約し、論を推し進めている。なかでも、その人文主義の根幹は人間のありのままの姿(human nature)への邂逅ということであろう。「人間の自然」とも簡約できるこの用語は、マルカスターの『提言』の中で頻発して使用されている。そして、Brailsfordも評しているように、Platon, Aristotélēs, Claudius Galenus, Hieronymus Mercurialis など当該時代以前の有識者の知見を包括し、古代・中世的な考え方と近代初期の人文主義における身体や修練を融合していく役割を担っていたといえる。(Dennis Brailsford (1969), *Sports and Society: Elizabeth to Anne*, London.) 渡辺によれば、マルカスターが身体訓練の必要性・重要性を訴えた理由と背景は、「彼が身体を『肉(flesh)』と捉える観念的・教条的な見方から脱却し、身体と精神の関係を善悪や喜怒哀楽の『協同者(copartner)』とみたからである」(渡辺、p.369.)と述べている。このようにルネサンス期ヒューマニズムを背景に、マルカスターは人間の存在をとらえなおしていた。

マルカスターは、身体修練とは、呼吸を変化さ

せる肉体の激しい自発的活動という定義が付与され、その目的は健康を保つことであり、肉体をよい習慣へともたらすことであるという。『提言』(1581年)の内容構成にみられるように、マルカスターは『提言』の刊行によって、身体修練の体系的整理をなし、①ゲームや気晴らしのための修練、賭博にかかわる修練、競技的修練②戦争や任務遂行のための修練、軍事的修練③健康と長寿のための修練、健康のための修練の3つに区分している。したがって、マルカスターの身体修練は、人間の本性に立ち返った身体修練として体系をなし、近代初期の学校教育において留意すべき内容が提言されていたといえる。

### 3. Richard Mulcaster の心身観

#### (1) 身体と精神の用例

body (身体) は、強くする、修練する、保護する、動かすというように、人間の主体としての身体として表現される。しかし、the soule and body ioyne (霊と肉体は繋がっている) という用例にみるように、soul という用語に対する body は、魂の抜けた身体という意味で肉体と理解することがよいであろう。一方、mind (精神 [知性]) は、精神の修練、精神の豊かにする、教示された精神、知識を身につけた精神という用例にみるように、精神=知性とみなされる。キリスト教の神に奴隷する霊の意味ではなく、知識を豊かにする人間の精神(知性)なのである。したがって、マルカスターのテキストにおいては、身体も精神も近代人としての人間に備わったものなのである。

#### (2) 霊と肉の用例

soul (魂・霊) は人間の精神性を表明しているのであるが、マルカスターの時代には中世的なキリスト教の神の庇護のもとに人間の魂や霊の存在が是認され、それらはけっして自立した人間には備わったものではないとみなされていた形跡がみられる。信心深い魂や魂を染みこませるといふ用例はその典型であろう。soul(e)の用語が body と併用される場合は、肉体と理解するべきであろう。both for bodie and soule (肉体にとっても魂にとっても)、both of bodie and soule (肉体と魂の双方)、both in soule and body (魂と肉体の双方)などの例

である。本来、中世的な考え方として、soul(e) (霊・魂) の対語として使用される flesh (肉・肉体) の用語もマルカスターのテキストの中では、残存していたとみてよい。それらが、pull downe the flesh (肉体を弱らせる)、abateth the abundance of flesh (肉体の有り余る量を減ずる)、in your flesh (あなたの肉体内で) などの用例である。こうした用例の比較検討によって、精神(知性)-身体、及び霊・魂-肉体の用例の明確な対応関係は看取できないが、次に述べるようにマルカスターの心身観をめぐる記述内容からはある程度論証可能となる。

### (3) 提言にみる心身観の例示

①身体と知性と両方を学校で訓練されなければならない。body と mind を対比させて説明する場合には、mind は知性の意味でマルカスターは使用している。

[試訳]

しかし、子どもを教育機関に寄宿させる手はずをとることと同じくらい、我々は、その子の身体の耐久力を考慮しなければならない。我々が訓練するのは、身体と知性の両者であり、両者があてはまるのである。そう考えることは決して劣らない。つまり知性が子どもにとって最も望ましいように指導されるように、身体も同様に最も望ましいように維持されるのである。知性を鍛え上げる際に、その方法はうまく探究されるのである。なぜなら、知性はあらゆる書物で幅広く取り扱われているし、学んだことの標題や体面を身に付けるからである。(Mulcaser, p.22.)

②マルカスターは exercise を、人為的な修練として理解している。その人の最善の状態を意味しているので、その人の body は、肉体ではなく、人間的な身体なのである。

[試訳]

主として生徒にとっては、身体をよりよくしたり、健康を維持するいかなる手段もないのであろうか？学生の習慣は、身体を零落に導くのか？そのとおりなのである。まさしく人間の本性として健康的な毎日を送ることは、修練として維持されていることなのである。そうした修練によって、身体についての人間らしさの機能のすべては、すぐれた働きをなし、身体はその本人の最善の機能を

完全に適合するようになるのである。(Mulcaster, p.22.)

③中世的な霊一肉の二元論的考え方からの脱却

マルカスターの時代には、霊はキリスト教の神に隷属し、人間には生身の肉体のみ存在するという考え方が支配的であった。人間の魂と肉体は常に一体化しているということからして、この場合は、精神(魂・霊)と身体(肉)の関係性がうかがえる。マルカスターの心身観の表現箇所：soul を魂と訳出する際には、body は肉体と適宜訳出することにする。

[試訳]

健康であつたり、病氣であつたり、優しかったり意地が悪かったり、歓喜に満ちていたり嘆き悲しんだりしても、精神と身体は共同して、共に一緒であるという意識を持っている。そして、あらゆる強烈な思いの中でも、相互に結びついているという意識にある。(Mulcaster, p.40.)

## 4. Mulcaster の身体運動論にみる内容論と方法論

### (1) Exercise

exercise は運動ではなく修練と訳出する。理由として the exercise of body (身体の修練) のように身体(body)にかかるだけでなく、the exercise of the mind (精神の修練)、The exercise of the voice (声(話す力)の修練)、this exercise of readings (読むことのこの修練) というように精神や話す力などの知的な部分にもかかっていることがあげられる。このようなことに鑑みて、exercise は運動ではなく修練と訳出する方が妥当である。また、exercise for health (健康のための修練) や healthfull exercise (健康に良い修練) という用例をみると exercise は単に運動することや能力を上げることだけではなく、健康という日常生活を豊かにする部分まで考えられていると理解できる。さらに、a swift exercise (動きの速い修練)、no other vehement exercise (全く激しくない修練)、quiet and gentle exercises (静かで礼儀正しい修練) の用例のように exercise には様々な種類があること、the place of exercise (修練の場所)、our maner and order of exercise (修練の方法と規律)、the places appointed for exercise (修練のために決められた場所) の用例にみられるように exercise を行うにあたって遵

守すべきことや注意すべきことにもマルカスターは触れている。

## (2) Training

training も exercise と同様、the training of the bodie (身体訓練) や the training of the minde (精神 (知性) の訓練) の用例にあるように、body (身体) と mind (精神) の両方にかかってくる。また training の対象者が様々であり、the training vp of a yong gentlemen (若い紳士の訓練)、the training vp of a yong prince (若い王子の訓練)、the training maister (教師の訓練)、the training of children (子どもたちの訓練)、the particular of young maidens (若い女の特別な訓練)、for training vp their young Emperour (若い皇帝の訓練のために) というよう用例が見られる。

## (3) Education

education は「教育」と訳出されることが一般的である。そもそも education は educate (養育する、教育する) から派生した言語で educate もまた、educare や educere という語が語源となっている。両者とも 'to educate' の意で用いられるが明確な違いは、educere は主に肉体的な養育について用いられていたのに対して、educare の方は精神的な養育の意で用いられていた。OED (Oxford English Dictionary) によると、education の意味は 'The process of nourishing or rearing a child or young person, an animal. (J.A.Simpson and E.S.C.Weiner, 1989) ' (子どもや若者、動物を育てるあるいは養育する過程) や 'The systematic instruction, schooling or training given to the young in preparation for the work of life; by extension, similar instruction or training obtained in adult age. (J.A.Simpson and E.S.C.Weiner, 1989) ' (生涯の仕事への予習として学校教育あるいは若者に与えられた訓練という体系的な手段。したがって同様の手段や訓練は大人にも通用する。) と記されている。

以上のことから、education も exercise や training と同様に肉体的・精神的な使い分けが行われていたことが理解でき、今の education の対象には肉体と精神の両者を上げることができるであろう。ま

た、子どもや若者だけでなく、大人に対しても education は通用するのである。

## (4) 精神と身体修練の例示

### ①修練における身体と精神の関係

身体の修練は精神の修練を促す。長く持ちこたえる身体を作るための修練がきつければきついほどそれに打ち勝つことで強い精神が獲得できる。

〔試訳〕

身体の修練は、常に精神の修練を伴い、情緒に左右されず、強い意志を持って、つらさにも耐え、それゆえ長く持ちこたえる身体にすることによって、精神の修練を促すものである。また活動的で、抜け目なく、賢明な肉体的な表情にもなり、その上、あらゆる点で経験上身につけられたような心の豊かさをも持つのである。(Mulcaster, p.22.)

### ②身体修練における精神状態

身体修練において、楽しさや喜びなどの精神の陽気さはさほど必要ではない。しかし、身体訓練が不快ということではない。

〔試訳〕

修練目的で身体を訓練するけれども、身体の動作について言えば、精神の陽気さを持った関心はそれほど多くない。それでいて、一方では修練は不快なものではないかもしれない。( Mulcaster, p.92.)

### ③修練：場所と時間との関連

身体と精神の修練は相互に関係している。このことは時間と場所においても同じであり、両者が同じ場所で同じ時間に行われているためである。

〔試訳〕

一般的な場所や時間に対するこれらの2つの条件は、身体の修練と精神の訓練の両方に連带的に関係している。なぜならそれらは同じ時間の割合ではないけれども、同様の場所で、同時に、身体の修練と精神の訓練が実施されているからである。(Mulcaster, p.224.)

### ④魂と肉体をめぐる時代認識

教育の訓練の役割は精神を豊かにするための学習と身体の可能性を探るための修練に2分される。しかし、生徒・教師は実行できないでいる。精神

や身体の修練に関する理解が不十分であること、実行はやっかいではないが一般に理解できるものではないこと、魂と肉体の関係性が受け入れられていないことが要因である。マルカスターがみた当時の時代認識を示している。

〔試訳〕

私は、教育の訓練を一方が精神を豊かにするための学習ということであり、他方が身体の可能性を探るための修練であるという2つの役割に分類したが、まだしばらくは生徒にも、同様に教師にも実行に移すことをためらっている。というのは、双方(精神と身体の修練)に関するが申し分なく十分になっているというわけではなく、簡単にそうなるというわけでもないからである。それらを実施するには、あまりにやっかいであるというわけではないが、一般に人間はそれらを理解できるというわけではない。神に従属するものが、魂と肉体がより密接に結びつけられていることを身をもって感じながら、(魂と肉体を)分けて考えることを受け入れることもまだできていないのである。

(精神が身体に、身体が精神にというように)一方が、他方にも関心を向ける必要があるに違いない。ある人は、両者の必要性を理解していたり、その上、両者にとって望ましいあり方をうまく識別することができているというようにである。

(Mulcaster, p.234.)

#### ⑤修練であって、運動とは直訳しない理由

マルカスターは、修練が人間の本性を手助けしているという。修練は身体にも、精神にも影響を与えている。身体のみではない、知性にも影響を与えている。exercise は、身体にも精神にも影響を与えるものであり、現象として見える動きは motion の用語が用いられている。

〔試訳〕

今では修練はどのような役割を持っているのであろうか? こうしたあらゆる作業において、動きを伴うことが人間の本性を助長し、健康へと増進させることになるのである。人間らしい体温を増加させ、その機能を促し、消化を促進し、排泄を強めるのである。身体のあらゆる部分を、それらの人間らしい最も望ましい振る舞いにあてはめ、適合させるのである。不必要で余剰な体液を除去

するのを促し、生理的要求をなにもなかったかのように維持し、排泄物を不要のものとし追い払うように促すだろう。その本人が十分に滋養強壮にあれば、むしろ、それは間違っているかもしれない。その後、体内に影響がみられるだろう。病気に撃退することによって、身体を防護し、知性の手段を強めることによって知的な精神を保持し、体内、体外で日々危険にさらされている人間的本性を手助けし、生命を長く維持しようとして死を先送りすることなど、これらは最大の効果ではないのであろうか? (Mulcaster, p.45.)

#### ⑥修練と訓練の違い

マルカスターの exercise のねらいとしての修練は、運動することだけではない。実用的に目に見える成果を求めるものではなく、人間らしくずっと継続していくような修練である。目的をもって、期間も定めてそれを達成するようにしたものは、訓練(training)である。

〔試訳〕

健康にとって、修練とは、我々が人間的本性によって与えられたり、我々が生得的に与えられないものを獲得し、不運や無頓着によってほとんど消失してしまったものを精励して熱心に取り戻すという、とても大がかりに左右するものなのであると言っても、一目瞭然なものである。賭け金を稼いだりするギャンブルにとっても、勝利を獲得するための戦争であつたりしても、私的な修練としてはこうした私的な目的に最もかなうものであり、健康的な身体は、最もふさわしく活動的である。私的な修練としては、日々の感覚的な事柄を意味しない。(Mulcaster, pp.52-53.)

#### 5. 結論

本研究は、リチャード・マルカスター (Richard Mulcaster c.1530-1611) の著書である『提言』にみる心身観と精神と身体の Exercise について明らかにすることを目的として研究を進めてきた。マルカスターは当時、知性や精神の教育についてしか考えられなかった時代に、身体の訓練の必要性と重要性をいち早く主張した人物である。このことについてマルカスターは『提言』(1581年)の中で説明している。

提言は全 45 章で構成され、(1) 提言発刊の理由と背景、(2) 子どもの知性と身体、(3) 修練(運動)について、(4) 教育における修練と教師の役割、(5) 総括の 5 つに分類できる。さらに(3)の修練(運動)については個別の身体修練(Chapter16～27)と修練に関する諸条件(Chapter28～34)に分類できる。提言の中でマルカスターは、精神と身体の両方における教育について論じていることが窺える。

マルカスターは提言の中で、body, mind, flesh, soul を使用しており、それらの用例をみられるように body は主に人間の身体と考えてよいが、soul と対応する場合のみ肉体と訳出すべきである。一方、mind は精神(=知性)としてみなすことができ、提言の中では身体も精神も人間に備わったものであると解釈できる。また soul は精神(=魂・霊)と訳出するのがよく、中世的な考えとして soul に対応する flesh は肉・肉体と訳出できる。用例の比較検討ではこの対応関係は明確には論証することは難しいが、心身観について書かれた記述内容によりある程度論証可能になる。

また、Exercise については exercise が body だけでなく mind, voice にもかかっていることから運動とではなく修練と訳出することが賢明である。また exercise は日常生活を豊かにする部分まで影響するとマルカスターが主張していることが用例から示唆される。さらに exercise の種類や exercise を行う上での注意やマナーについてもマルカスターは述べている。これらの exercise 用例はほとんど(3)修練(運動)についてに用いられている。exercise と同様に training と education に関しても精神的・肉体的な使いわけが行われていることが用例から示唆された。マルカスターにとって精神と身体の関係性は重要なことであり、そのことは exercise, training, education の 3 つの語句の用例から見て取ることができる。

マルカスターが唱えた精神と身体の両者を一緒に修練することは今日の文部科学省が公示する学習指導要領解説保健体育編・体育編(平成 21 年度版)にみる教科の目標である「心と体を一体としてとらえ～」という部分にも表現されているように現在の体育授業においても重要な点である。身

体の部分だけでなく、精神や知性まで体育の授業で育むことが望まれ、16 世紀の時点でマルカスターがそのことについて述べていることに鑑みると、マルカスターは心身観に卓見を示した人文主義者であったといえよう。こうしたマルカスターの主張は現代にも通用するものであり、彼の著書 Positions は資料価値を有するものであることが示唆された。

## 6. 引用・参考文献

1. 阿部生雄(1980)、「イギリス・テューダー・ルネッサンス期の体育思想素描」、宇都宮大学教養部研究発表会 第 1 部 13 号、pp.37-60.
2. 青山吉信・今井 宏(1982)、概説イギリス史 [新編]、有斐閣選書、pp.80-95.
3. Dennis Brailsford (1969), *Sports and Society: Elizabeth to Anne*, London.
4. Fred Eugene Leonard(1947), *A Guide to The History of Physical Education*, The 3rd edit. Revised and Enlarged, London 1947.
5. Jacqueline Cousin-Desjobert(2013), *Richard Mulcaster c.1531-1611 un educteur de la Renaissance anglaise*, Paris
6. James Oliphant(1903), *The Educational Writings of Richard Mulcaster(1532-1611)*, Glasgow
7. J.A.Simpson and E.S.C.Weiner(1989), *The Oxford English Dictionary, Second Edition, Volume V(dvandra-follis)*, Oxford.
8. 加藤元和(1984)、「近代初期における身体運動の史的研究(10) Richard Mulcaster と Positions」、『日本体育学会大会号』、35 巻、p.80.
9. Peter C. McIntosh et al.(1957), *Landmarks in the History of Physical Education*, London
10. Richard L.Demolen (1991), *Richard Mulcaster(c.1531-1611) and Education Reform in the Renaissance*, Nieuwkoop (Holland)
11. Richard Mulcaster(1581), *Positions wherein those primitive circumstances be examined, which are necessarie for the training up of children, either for skill in their booke, or health in their bodie*, London.
12. Robert Hebert Quick(1888), 'Appendix: Containing some account of his Life and Writings'. In;Richard Mulcaster, *Positions* (reprint version), 1888, London, pp.299-309.,
13. Theodor Klähr(1893), *Leben und Werke Richard Mulcaster's eines englischen Pädagogen des 16.Jahrhunderts*, Dresden
14. 渡辺誠一(2001)、「リチャード・マルカスターの教育論に関する一考察」、山形大学紀要教育科学 第 12 巻 第 4 号、pp.369-379.